

御書院番六番

三



内閣文庫
番號 和 32569
冊數 394 (182)
函號 152 121

庫文内内			
一五三函一四架	三九二冊	三三九五九號	和書類



元文四年六月廿九日

御書院者松城藩内守但

西丸市庄組松平傳兵衛之御二編養子

三原 齋川八十而一周

後九百石

改分會書

延享三年九月廿日大崎田村浦後育

時服とて候

延享四年六月廿日浦り橋坂方村に列

時服とて候、咽の上旨書に在りて、美奈とて候

寛延二年三月廿九日大崎田村浦後育村に

列て時服とて候

宝曆二年三月廿日浦り橋坂の村に連

河原三郎の事
同書院書院
同書院書院

宝曆七年九月廿一日
返一奉

宝曆七年九月廿一日
留物

同書院書院
同書院書院

宝曆七年九月廿一日
同書院書院

宝曆七年八月廿一日死

元文六申年三月十日

享保十六年三月十日

同書院書院

二千石

同部主水

同部主水

延享二年十月十七日

同部主水
同部主水

同部主水
同部主水

寛文元年春秋陸奥のちかきまき

任ふ所被務奉りしとむかし

宝暦二年秋陸奥の津屋屋へ

宝暦八年二月八日伊予

口まき三月八日ちかきまき

宝暦九年二月八日丹後國宮津城

川邊津用と命をきき三月朔日伊予

美令と揚り七月廿八日伊予津屋屋

宝暦十年二月六日新田のちかきまき

津屋の邸被務まき

天明四年三月廿七日酒井有吉忠休

相居の邸にまきまき

まきまき

まきまき

まきまき

まきまき

天明八年三月廿二日死す六歳

元文五年二月十日

元文四年二月九日

御書院番紙紙張河守但 若石 森川十九郎氏方

森川十九郎氏勝長又
出書院但七子三郎氏死

同年秋諸侯の事あり

寛保二年三月廿一日入松下品高氏死

安永四年三月廿一日教任氏死

寛保二年三月廿一日

天明八年六月廿一日死

元文乙卯年三月十日

享保二十九年三月十日

内記忠孝書

忠孝傳述永井監物之死

御書院書形或波河守也

子之若 忠孝傳述永井監物之死

延享二年三月六日之書

寛延二年三月某日移入今南宮女之死

宝曆元年三月某日死甲子案

元文乙申年二月十日

西暦四十年四月十日

河書院前松城河守但 喜信 松平助右衛門道和

松平喜右衛門道和任津守熱心
山喜信但永井監物文死

同年秋松城の警備に當りて是後

喜右衛門道和の死に當りて是後

安永乙未年三月廿日老將徳兵衛全二入出部布記文記

天明三年四月十日死

元文五年二月十日

御書院番松城渡河守道

海軍

左内三右近

山崎信但行伴國房より死

三右衛門 横山主殿知照

後右衛門

後左内

同春秋松城の影を承りし事

寛保二比事二月九日父より九月三日迄跡

六百石と賜りし事この三右衛門に奉る

延享四年九月十日拜入大臣忠節と死

宝暦三年二月十日青山六郎所の

御書院番の事

宝暦九年辛卯四月六日西御書院番武田

延喜寺御入

元文五申年三月十日

元文三年二月廿日

御書院書紙紙紙河守但三景 柳原友七而志紀

柳原中布志道忠成

出書信但六景忠而志紀

口年秋邊城の宿志の糸くま月と
世清城の影志信を一事の友

延喜四年三月十日大内宿村邊の
村志の別て皆申あきし町殿と揚る
明和六年二月二日邊城の宿志留年
少く麻布白報而敵臨の部自大りて
柳原の志六日月廿七日志十人し作

りり三月廿二日

安永七年十一月廿五日 祥入 河津 或部 之 死

安永九年三月廿四日 祥入 致仕 誓 之 死

良休 之 云

天明二年三月廿六日 死 市 七 案

元文六年三月十日

元文三年三月廿日 祭 誓

左 多 史 伴 次 春 子

山 善 信 但 能 誓 市 而 之 死

御書院 苗 松 誠 駿 河 守 但

三 信 安 後 之 康 英 次

改 其 誓 也

旧 年 秋 踏 堀 の 右 之 子 弟

寛保二年 月 日 祥 入 五 田 八 右 衛 門 之 死

明和二年三月廿日 死 市 七 案

元文八年三月十日

元文八年六月十日

新公而政誠養子

山書院舊本

山書院舊本秋誠瀧門守但 三原梅斐丸

後元帝

延喜元年九月五日禪入長谷川久之帝而死

天明二年三月三日免七古歲

元文乙申年三月十日

元文乙申年三月十日

御書院書紙紙源河守領

三言依 伊丹七ノ丞勝慶

七言鳥ノ勝信橋孫承祖

小言信但西郭伊成子死

同年九月後春在書院服祓好之賜

寛保三年三月三日

延享四年三月三日

寛延二年三月三日

石表令板下

宝曆元年三月三日

天和元年三月三日

寛文二年二月九日

宝曆七年二月九日死

元文六年二月廿六日

御書院番松城後河守但三信 山城十而政明

寛文元年秋諸城の形

寛文元年秋諸城の形

宝曆七年十月廿六日

宝曆七年十月廿六日

宝曆七年十月廿六日

宝曆七年十月廿六日

寛保七年三月朔日死す

寛保二年三月三日

寺書院苗松平系女祖 二女後福王三女而信好

上宮書院福王三女而信好

同日康平二女信好而信好の母信好と云

寛保二女康平二女信好の母信好と云

寛保二女康平二女信好の母信好と云

明和八年三月三日家督二女信好の母

百俵と云ふは是等の言俵に及らざると
其の料は揚子

嘉永六年四月日光の法住下置い

天明二年三月廿日移入城廓古倉庫に死

天明七年正月廿日死年三十一

延享元年正月廿日

延享元年正月廿日

彦左衛門忠備

山形信直行中園守に死

山形信直行中園守に死
三右衛門久保平助忠直

改彦左衛門

延享元年七月廿日

宝曆六年七月廿日移入横山内記に死

宝曆六年七月廿日移入横山内記に死

南寧と云

延喜元年三月廿日

延喜元年八月二日

河書院番松平宗直

于石大井之水持長

云十市改有卷子

小菅信恒行中園信守等

改 新右衛門

大和守 信忠守

延喜元年七月七日

同年三月三日

同年四月九日

宝曆二年二月廿日

志多山形白屋村

河原三子

宝曆十年三月十三日

らるる八石連(一)

宝曆十二年十一月十日陸羽法後有て
留物(二)と揚(一)

宝曆十二年十二月十日世茂

若君の侍方(一)侍人進(一)と(一)

同(一)年(一)月(一)日(一)飯(一)子(一)子(一)属(一)と(一)也(一)

明和六年十一月十日(一)所(一)出(一)納(一)取(一)取(一)

同(一)年(一)三月(一)十八(一)日(一)叙(一)爵(一)云(一)作(一)出(一)大(一)和(一)寺(一)上(一)改(一)

安永六年十一月三日(一)御(一)寄(一)野(一)掛(一)と(一)令(一)さ(一)ま(一)

安永六年四月九日

後(一)明(一)院(一)殿(一)目(一)元(一)信(一)之(一)と(一)之(一)の(一)選(一)と(一)

う(一)り(一)お(一)岩(一)概(一)と(一)と(一)

孝春院殿(一)より(一)の(一)侍(一)使(一)の(一)あ(一)り(一)の(一)時(一)の(一)

張(一)料(一)と(一)て(一)其(一)令(一)に(一)揚(一)と(一)ま(一)し(一)

將軍家(一)より(一)綿(一)酒(一)と(一)揚(一)と(一)

安永六年六月五日(一)西(一)城(一)の(一)侍(一)元(一)施(一)取(一)

安永八年四月十日(一)所(一)出(一)納(一)と(一)替(一)と(一)ま(一)

作(一)也(一)

安永九年六月八日

孝廟(一)と(一)終(一)極(一)を(一)し(一)て(一)侍(一)使(一)と(一)候(一)と(一)

天明元年六月六日(一)西(一)城(一)と(一)替(一)と(一)ま(一)

作(一)也(一)

同(一)年(一)同(一)月(一)十八(一)日

若君乃(一)侍(一)方(一)に(一)属(一)と(一)ま(一)し(一)

天明六年辛酉十月廿日 河津城上勢（き）
よ（作り）

天明八年辛卯二月廿日

清明院殿の新御願と御書（き）

付腹三と揚（き）

寛政六箇年二月廿日 老拜揚付腹三

寄合（き）

口辛七月廿日 致仕主料三寄依（き）

口辛口月廿日 寄合（き）

寛政十年辛卯二月廿日 辛卯年（き）

延享元年辛酉七月廿日

寛保二年辛酉七月廿日

河津院書松平常女（き）

後助二道（き）

出書信但六川内助（き）

子音 村上久（き）

後 大膳（き）

寛延元在辛酉秋踏城（き）

寛延二年辛酉七月廿日 祥入松平（き）

宝曆元年辛酉四月廿日 河津院書佐野

右三條射組（き）

延享元年三月廿日

延享元年三月廿日

書院書松平宗女祖 三原菅沼小幡定親

改 大書

菅沼新左衛門定尚庶孫兼祖

小菅信祖天川因能脚之祖

定親之父吉原定輝より其子出

守中世祖より其子信祖より其子出

死し其嗣子之屬定候は定親嫡孫也祖

と稱して又其子は定親祖父之庶孫

兼祖と稱す

寛延元年秋宝曆六年秋

明和元年秋安永元年秋

作有明の末年三月卒官を云ふ

祐之雅き何より美事と爲るべき
綱目ものすゝまの草木の形を論
しゝゝゝゝ草木の圖画彩色の
那ゝ年以來蔵小とてしるは抄定
奉り帯も石谷澄路も清昌右乃也と
いそふにんゝ抄側の稲葉部中も
語りしにんゝゝゝに夫も但て
贈りしゝゝゝ

河原入奉り全備認せうらゝ
孰もよきよ作有るゝ清昌傳へ
りきは年以の好ゝ道玄に於て

祐之 啓よよまてはえゝ事ゝゝ
祐の思ひゝゝ清昌ゝゝゝ
上庶物類纂圖翼と稱ゝ全二十
七冊の別録副書二冊五帙箱内
安永八五年四月孰りゝゝに同十
らゝゝ 河原有るゝ磨を澄路
事録の次録守山明成所ゝ
澄路も清昌と作と傳ゝゝゝ
羽三重七と下場共八月六日祐之
矣ゝに廿事ありて草木の如懐
と三川を

安永八五年八月六日死す由蔵

延享元五年三月五日

寛保元五年三月七日

嘉永元年一月廿九日

小治政元年一月廿九日

御書院番松平宗玄組 千三郎 宗山 修理 一道

寛延三元三月五日 辭入 兼田 七郎 守 死

明和二年八月廿日 致仕

文化元五年十月六日 死 八十一歳

延享元子年六月廿日

享保十三年六月廿日

所書院書松平宗玄組

子石 山崎竹宮政長

山崎水政章忠成

山崎信組長谷川久常生宛

寛延元辰年秋洛城の書

宝曆三年秋洛城の書

宝曆十三年六月廿日

延享元年十月廿日

延享元年十月廿日

再勅 山崎信祖長春河久三帝上院

御書院苗松平宗女三廻言奉 四願之帝(慶)忠利

寛延元年秋陸奥の番を以てありて

彼由城より来て延享元年三月廿日

安永四年三月廿日老稱編美令 入三河(鐵)守上院

口奉八月十九日死七十一歳

延享元年十月廿日

延享元年十月廿日

御書院番松平系五郎

九番右多利忠武
改(松平)

米馬忠尚書

山崎信但永井堅直等死

宝曆二申年二月廿日人の行り

活版の字をよみしりて(その文より)

三編のよみしりて

宝曆二申年八月廿日於後奉懐死す(その)

延喜元元子年十月廿日

寛保三子年十月廿日

御書院青松年宗女山組言依酒依公十而昌表

七弟之侍昌春貴子

山宗後祖松下如藤之死

改七弟之侍

寛延元元子年秋路邊の宗女(子)

宝曆三子年二月十二日死(子)

七月五日百福丸知使

延享元年七月廿日

寛保二年九月廿日

御書院番松平系女御 子右 横田三右衛門松春

御官由松春子

小菅信恒松平知重傳

明和元年七月廿日沙使番

旧年七月十三日布衣志と名をさす

旧年同七月十六日大坂御用を仰ると

命をさす明の石平七月廿日沙使

若令なと傷し七月御用は浮揚す

明和六年二月廿日釋法台

旧年七月廿日元甲七

寛延元年五月十日

元文五年三月廿未智

織部松成忠成

山崎信但三月廿未智死

御書院南青山信慶守但二月廿未智村越茂物三茂

日本春秋源城の影三信三茂

宝曆二年五月廿死二十家

寛延元年六月十日

延享元年六月三日

延享元年六月三日

山内信恒

山内信恒

千二百三

山内信恒

改

日平秋

治城

宝曆十

八月

四月

二月

九月

細目ゆきし深揚す

安永六年四月日迄の御侍の御記

天明四年八月廿日死す由來

寛延元年六月十日

延享二年七月前御侍の御記

御書院南青山信濃守御

千吉久保平左衛門勝里

御次郎政周忠貞

小菅信重御侍の御記

口奉秋路城の御侍小菅の御記

痛むまゝに御侍の御記

寛延二年三月廿日御入川橋左衛門の御記

明和元年八月廿日死す由來

寛延元年六月十日

寛延元年四月三日

御書院青首山信法守組

草名天野傳之助之豊

改傳之

孫及馬之計忠成

小菅信細川勝左衛門

口奉秋澄候の者並にありて其後二交

澄候の者より一筆信守

明和元年六月八日死

寛延元年七月十日

寛延元年七月十日

御書院青山信忠守組

後帝光奉忍成
山崎信忠全由
山崎信忠全由
改在年々

日年秋澄城の事也日年

宝曆六年秋明和元年秋安永元

在年秋澄城の事也日年

安永七年七月十日

安永八年七月十日

寛延元年六月十日

寛延元年四月十日

事江馬橋延書子

小菅信但全同弟如死

河書院青山信信守但 音後 石河勘之丞勝昌

勝昌波城日富志立一事件の如人

以之 奏傳子之如人

明和八年五月五日死 享年四十六

寶曆元年正月十日

延喜元年三月五日

延喜元年三月五日

延喜元年三月五日

書院書青山信長守但 官信守女成信

延喜元年

口年秋治臨の書

寶曆元年三月五日

寶曆二年六月一日

安永四年九月七日

寶曆六年十月十日

寛延元年六月十日

享保十六年三月五日

中江氏種久

山崎氏種久

行書院書青山信康字組 首名 有安 長次郎種房

改 甚久馬

同年秋宝曆六年秋 澄城乃

如也

宝曆十二年二月七日 死 早公家

二と流るるはよりして年毎に二夜り
出で恩賜あまうべ

宝曆十三年二月十日三日の傷
流福子の射と替先日月五日
美全に流る

宝曆十三年九月廿日入るめきと流る
唐の料日一りた送流とわ

明和元年二月十日の也く替の月
言信と是より作と流る

明和五年二月廿日西成の流る
安永八年四月十日一統をさして
小別一とこの也く言信の流る

傳り

天明六年二月廿日九

寛延三年三月廿一日

南河内守 徳川 綱元 守 吉成 豊 彦

行書院番青山右衛門守徳川綱元別冊守彌

寛延三年三月廿一日 任 御出納

口年三月廿八日 布衣志士 徳川 綱元

宝曆元年七月廿一日 任 一統御免

是令子到守

宝曆三年八月廿一日 任 死 二十二年

寛延三年辛酉二月廿日

御書院番青山平河守但

御書院番青山平河守但

三石後川勝助左衛門廣典

後三石

宝曆丙寅年十月廿七日通旨右大臣の

三石後返一奉る

安永元年辛酉二月廿九日同様の書状にて

宛の日の内ある御書院番の御書

安永丙申年四月廿日先づ御書院番の御書にて

あつた御書院番の御書

安永九子辛酉四月廿八日宛右大臣

寛延三年三月廿日

大石様沖渡但去後多引但市更至宝曆
中書院番青山房法守但三儀酒井洋之助定保

後 宗女
改 宗女
新 宗女

宝曆七年三月廿日
瑞物死と揚

宝曆七年八月廿七日
瑞物死と揚

日奉秋渡隊の者
瑞物死と揚

日奉三月廿日
瑞物死と揚

菅中八百三十三年九月廿二日

宝曆九年九月廿九日

瑞如と湯

宝曆十年九月廿七日

列々時辰と湯

宝曆十一年四月廿九日

瑞如と湯

明和元年秋

明和二年九月廿七日

九月廿二日

明和八年十月 日祥入青山と馬と

安永元年九月廿七日

宝曆二申年九月十日

寛延元年八月二日

彦三帝秋刻

小菅信組甲申出陣年

御書院番青山

吉原小澤彦三帝成紀

改年

諸侯の書道を以て事とするの外

寛永元年二月九日大崎藩の討伐に

列一討伐に備る

寛永元年四月日光の御旅に随ひて

御書院番

天明八年秋諸侯の書道を以て討伐

を以て事む

寶曆四年七月九日死

宝曆二年九月十日

御書院南青山

再初

守徳 三侯 山内 主水 豊泰

野馬改豊泰

出雲守但田中出初守

改 洋馬

教馬

活坂の部

明和八年十月某日移入長谷川

安永二年四月八日致仕

安永三年八月三日致仕

天明元年七月某日死

宝曆二年九月十日

寛延二年三月三日

御書院書青出若志年道 上書二宅神の御云候

改書書

海三書云邦志候

山書信但織田海子而之死

宝曆六年三月十日

宝曆八年三月十日

宝曆二年辛九月十日

宝曆元年辛八月九日亥時

元九帝三十七年

中書侍郎楊山内記

御書院番首山内記等組 吉原 山内 庄橋 吉長

改元九帝

宝曆三年十月六日 塚村清隆首て
湯物死す

宝曆四年十月三日 又其事有り
明日日當中八日 又其事有り
宝曆五年九月 陸奥の郡に
危き事あり 此地より 此の
中事 秋に書し 此の事あり

之に由り五月青段森河内徳守俊周
是を乞ふを以て勢を遂に先替むべき
よしと傳へらる

宝曆十年二月廿日麻布永恆の邦
難たふかる

明和元年九月活城乃警備り
あり悟法被歿奉りしと替む

明和二年九月廿九日死四十二歳

宝曆二申年九月十日

延享二年三月六日歸

山書院青出山院宗祖 三原 山内宗常 宗定 福

主膳宗常 忠成
小菅宗恒 山内記之助

宝曆四年三月廿日宗常宗恒有る

明の冒書宗常宗恒有る

宝曆六年三月廿日宗常宗恒有る

福ひありあり宗常宗恒有る

宝曆七年三月廿日宗常宗恒有る

明和元年八月廿日宗常宗恒有る

明和六年二月廿日宗常宗恒有る

宝曆二申年九月十日

宝曆元年九月三日

御書院黄青山宮内卿 七雲 石谷曲を而清魚

十勅信實書成
出書院御中多々書きたり

宝曆三年秋陸府の幸書院服白袷

対上揚了口八書年又陸城主人の仲り

こゝろ書成し口上三年又そり人

しと陸城の誦さしとせ波不と聲書

明和二年九月十日死甲子

宝曆二申年九月十日

宝曆元年八月廿日

長江島信仍法男其胤

山崎信但如多子大寺寺記

河書院苗青山為法宗也 景石佐之間三坐信之

改

織部

宝曆三酉年福多〜二信如申八

宝曆三酉年七月廿日釋入栲山月記之記

宝曆三酉年六月十日河書院苗村和承守

但入

宝曆二申年九月十日

宝曆二申年三月六日

其子帝后以

小童信祖三枚帝后上死

御書院書者山形信守祖 其子 井上十次而其在

宝曆七壬申年十月九日死于八案

宝曆二申年九月十日

宝曆元年申年十月九日

御書院苗首山平陸守組 高名 井出十三郎三賢

送彩馬

左近衛門右非助殿

中務信但三枝家四郎守之丞

宝曆三年十月分幕府の諸士因

せしこと以合年及と御書院

宝曆六年申年二月曾死于六家

宝曆二年十月廿七日

南書院南書院南書院
三條日下南書院南書院

後百石

宝曆二年十月廿七日
南書院南書院南書院

宝曆二年十月廿七日
南書院南書院南書院

宝曆二年十月廿七日
南書院南書院南書院

徳用は是の江戸より出りし

宝暦七年十月廿七日徳用は百石を以て

三石俵に奉り

宝暦八年十月廿六日徳用は百石を以て

徳用は是の場

口年十月廿日又徳用は百石を以て

口年十月廿日又徳用は百石を以て

宝暦十年十月廿六日徳用は百石を以て

宝暦十一年十月廿六日徳用は百石を以て

宝暦十二年十月廿六日徳用は百石を以て

徳用は是の場

明和二年九月廿八日徳用は

口年十月廿九日徳用は百石を以て

明和五年十月廿七日徳用は百石を以て

明和七年十月廿七日徳用は百石を以て

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

徳用は是の場

安永七年三月八日在会津藩の留
相良の部と直して一時郵路の
滞り形事字在番山南の部を
核一事とあり止るに因法の手
あより傳書に御事出さる事と
らる程あり

安永九年四月五日津藩守在番
天明元年九月八日死す由來

宝曆六年二月九日

宝曆六年三月十日三日

津藩院番森川守組 重喜 若瀬清助氏以
改在番

右左衛門氏重喜
中書後進山氏部と死

同年九月朔日津藩と字とあり

津藩院と揚ふ所の十月三日津藩

宝曆中在年二月三日津藩守在番の部とあり

明和元年九月朔日津藩と字とあり
津藩院と揚ふ所の十月三日津藩

明和元年十月二日死す由來

宝曆六年三月九日

宝曆六年九月廿三日

六月廿三日

山内氏部

山内氏部 向井玄部

改部

口辛秋澄城の影書

宝曆三年辛酉正月廿三日

明和元年辛酉秋澄城の影書

明和元年辛酉九月廿三日

明和元年

明和六年六月九日

明和七年六月廿三日

宝曆六年三月九日

宝曆六年三月九日

新八郎西德惣从

山崎重信横山内記之死

御書院者森川下總守道子喜喜若松平秀次帝命

改新八郎

旧年秋活隊の形を承り

明和元年秋活隊の形を承り

所へ後と替り

明和元年三月廿八日御書院者道子

旧年三月廿八日御書院者道子

安永元年三月廿六日死

宝曆六年三月十九日

宝曆六年三月十四日

御書院番森川下徳守徳 五三景 長田二八馬 総統

改 森川下 下徳守

同辛九月踏城中ありくありなり

明和元年又踏城中ありくありなり

以内御初徳奉引りなりむ

明和二年三月十日御書

同辛三月十八日布衣志なりなり

明和三年六月十日御書
令書り七月十日御書なり

明の五年六月相見ゆて浮揚す

安永三年三月八日由光より以

安永四年四月田光の御供と遊ひ

古河城川と門と遊ばし田光よりハ

沙塵と遊ばし

口年十月廿日掘補の役とあつても

作り

安永六年四月廿六日親来れり遊ば

安永九年八月廿日

孝泰願と遊ばし其れとて所服と遊

五兩八年三月廿日

後明願と遊ばし其れとて所服と遊

寛政元年三月廿九日御給奉行

寛政二年九月和永守兼寛朝郎

郎は百とれて八王と千人の改と

合とれまより共事に遊ばし

明の五年六月の末八王と千人

かゝる人馬の御供と遊ばし御代

あつて千人の御代と改と

寛政三年五月廿日御給奉行

口年三月廿日御給奉行御代と改

寛政七年三月廿日水道の水元と遊

多光と遊ばし御代と改と

寛政八年三月廿日御給奉行

宝曆六年二月十九日

宝曆六年二月十九日

山書院南森川中徳守徳之丞能保忠全頼寛

改三年

活版の紙巻の事

安永元年秋活版の紙巻の事

活版の紙巻の事

安永元年二月十九日

頼寛在職の時

其の時より其の事

其の事より其の時

頼親狂疾多しの子孫はハ一族送歸の
事と列し國二月六日送歸すと云ふ石
頼親も送る

宝曆六年三月十九日

宝曆六年十月廿三日

山書院南森川下總守恒三侯國田守馬由光

山書院南森川

山書院南森川

同春秋明和元年春秋元年春秋

陸奥の事

安永九年春秋小し同

陸奥にハ明の年病かたされて

天明元年七月三日陸奥死す

宝曆八年二月廿日

宝曆七年十二月廿日

御書院書林以下總守組于古名 飯河公而時信

若尾為仲信熱心

山本信組之由平而于死

宝曆十三年九月八日死 宇田宗本

宝曆八年二月廿日

宝曆五年三月廿日

山崎法印松平新馬之死

山崎院南森川中絶守但志若 仔丹端次而景興

改定家傳

宝曆十二年十月三日之函上後十

時服之と揚子

安永元年春 陸奥守 志若 山崎院 白根十次

治了 函子 爲て 事とと 致

安永六年 申年 四月 日 志若 而 依 去 一 四月

活料とと 一 一 函 根 而 依 上 致

安永六年 三月 廿三日 死 申年 二月

宝曆八年二月廿日

寛延二年七月廿九日奉旨

御書院苗在梅川下徳守道 景若 田村物之而顯云

助多又顯紀惣所

中書後進田中出和守の死

改 臣部 御書院

安永六年六月廿九日の書院に

安永九年秋後進の筆蹟にあり

明の年春より一痛あり

天明元年七月廿九日詔後進免年三累

宝曆八年二月廿日

宝曆七年三月廿日

后九節義也

行書院苗森川中總守總景儀文部方之安義信

改年人
作威

明和二年三月廿日移入川口總守也

安永四年三月廿日致仕

宝曆八年二月廿日

宝曆七年三月廿日家督

御書院南條川中徳守組

三右衛門 石川 河津而貴朝

改三左衛門

河津而貴朝

少将法祖八弟十三郎之死

宝曆十三年三月廿日移入而橋大膳之死

安永元年三月廿日死四子之累

宝曆八年二月廿日

元文四年三月廿三日

源氏布正信房

平書院苗孫川下總守組

山内信祖松平頼朝の子孫

三原山内宗次郎三郎三郎

改源氏布

宝曆十三年三月廿日移入川口信成子孫

安永九年三月廿日西丸信成子孫

川口信成

宝曆八年二月廿日

宝曆七年三月廿日

山書院苗森川下總守也

言候世苗主馬當也
改大勅

明和二年三月廿日

安永元年九月十日死

葉田文房馬主當也

小菅信恒今苗主也

宝曆八年二月廿日

宝曆七年九月廿日

延和元年九月廿日

延和元年九月廿日

御書院苗森川下總守恒 三原之松織 忠定侍

改一苗森川
下總守

明和元年九月廿日

明和元年九月廿日 移入神尾若狭守之記

天明元年九月廿日 延和元年九月廿日

下總守恒苗森川

明和元申年四月十日より揚始の村に
連りて時辰を隔り明の十日官中にて
黄令と終る。

日奉初段城の宿をへりて黄令を
射武と号しハに終る。

明和三年四月十日より揚始の村に
時辰を隔り明の十日官中にて黄令と終る。

明和七年四月十日より揚始の村に
時辰を隔り明の十日官中にて黄令と終る。

安永元年四月十日より揚始の村に
時辰を隔り明の十日官中にて黄令と終る。

日奉初段城の宿をへりて黄令を
射武と号しハに終る。

射武と号しハに終る。

日奉十月九日大の浦後の村に
時辰を隔り

安永二年十月十日大の浦後の村に
時辰を隔り

安永申年四月十日より揚始の村に
列りて時辰を隔り明の十日官中にて
黄令と終る。

日奉四月日光の浦後を隔り

安永八年四月十日より揚始の村に
列りて時辰を隔り明の十日官中にて
黄令と終る。

天明二寅年二月九日中里にて東の宮院
有る一隅也云々

天明六午年二月六日在る所所の邸
新大日

天明八申年秋踏城の警備に於て
實政元年十月三日田物所迄有る
維羅紗文致編云々

實政元年十月五日死す八采

百廿四下福不敷

宝曆八寅年二月廿二日

宝曆七午年十月廿九日

御書院苗森川下總守組 上名 多門助三郎信照

後傳八市

傳八市信長養子

山崎信祖三田治守而亡死

明和元申年秋踏城も多る警備に於て

一と無分所被致奉り云々

安永元在年九月又踏城も多る

警備に於て同分を警備

安永五申年四月日光の所佐に隨ひ

安永九年九月踏城も多る警備に

於て八名所へ往て警備

天明四年二月八日御書院書院

口年三月十日布衣志と名なき

天明八年九月相習踏破の筆蹟
事は六市帳目帳行に傷く明の年
十月十日頃より身は細く執り洋書
寛政三年七月五日年橋の書
長田長町の御書院より
〜〜〜

寛政六年四月十日元字案

二月廿日百三拾不仕候

宝曆八年二月二日

宝曆七年三月十日家督

御書院書院川下総年

伴野法之助貞長

友之助貞徳忠成

少菅信之助元田源平忠成

明和元年三月十日京鴨羽野乃

郎白火の〜〜〜焼く

明和二年三月十日様入改樂若江島上祀

安永元年三月十日津波御之白肥市

宝曆三年九月廿八日

御書院苗巨規日向守但
三原教宗志元貞曠

出書後御書之紙後未苦在是身貞根也

明和六年七月廿日
御書院苗巨規日向守但
三原教宗志元貞曠

宝曆十二年九月廿八日

御書院番巨勢日向守組
三番依橋本彦左衛門連忠

宝曆十二年十月廿日
任出奉

宝曆十三年九月廿八日

御書院番巨帳日向守組

御書院番巨帳日向守組

三右衛門 恒 幾之助 知秀

後 子 忠 名

後 子 忠 名

明和八年二月三日進物番

安永二年四月八日奉替于言石是安

三右衛門 父之老と長小科日揚

安永四年九月廿二日死とすく七之助

忠と名(子)

安永七年八月廿八日死とす九景

宝曆十二年九月廿八日

御書院苗巨隈日向守總 二信阿部左衛門守兼
後(右)守

日向守兼の属家二信と傳つ誓の月
百信とたしめし

明和元年申年秋陸奥の名取より
明和二年申年分月二信と傳つ誓の月
二信とたしめし

安永七年申年四月日光の清信より
安永七年申年秋陸奥の名取より

安永八年六月八日於陸城死年六

宝曆十二年九月廿日

山書院南巨勢日向守但

山書院南巨勢日向守但

三信 尾川右衛門左衛門

後千八百

明和元年秋陸城の難事あり

明和七年八月廿日海月五右衛門左衛門

三信 後千八百

安永元年六月廿日山書院南巨勢日向守但

曰年九月相見陸城の難事あり

白紙好し備し廿日有る事と云ふ事

安永元年十月廿日有る事と云ふ事

浮揚一具詳細云と抄。

安永四十年六月十日有来日先西位と

合々々々明の申年四月五日路村白根

標と揚の四月路村の西位と西

安永九年九月廿四日路村の西位と

安永九年九月廿四日路村の西位と

天明元年十月十日有来日先西位と

鳥津細云と抄。

天明四年十月十日有来日先西位と

天明六年九月三日死す年未

宝曆十三年九月廿八日

所記院他在(道長忠成)

所書院苗巨終日向守組 三原田長幸(道長忠成)

明和元年十月七日有来日先西位と

明和元年十月七日有来日先西位と

明和元年十月七日有来日先西位と

揚。

明和七年六月六日又電的所後有て

揚と云と揚。

明和七年三月廿七日有来日先西位と

連つた時辰と揚子

安永元在年四月廿日草鹿河後有く
揚子と揚子

同年十月廿九日大崎河後村に列く
時辰と揚子

安永三在年一月廿日國崎河後乃村に
列く揚子と揚子

安永六在年二月廿日大崎河後乃村に
列く時辰と揚子

同年四月廿日光の河後乃村に

安永七在年二月廿日大崎河後乃村に
連つた揚子と揚子

安永九在年八月廿日山崎河後有て揚子
と揚子

天明元在年二月廿日大崎河後乃村に連つ
た時辰と揚子

天明二在年十月廿日又大崎河後有て
時辰と揚子

天明三在年四月廿日大崎河後有て揚子
と揚子、大崎河後乃村に九月廿日
揚子と揚子

同年九月廿日山崎河後乃村に連つ
た揚子と揚子

天明五在年十月廿日大崎河後乃村に

宝曆十一年九月八日

御書院南巨勢日向守道

御酒之毎夜幸及徳威恩

三條 母夜三六總長

後出書
四二五十一夜

法長八節

明和元年四月二日瑞村南院有之瑞為之
揚

曰幸秋澄城の若出の糸之つぎ小瑞村乃

所用ありては瑞村止り也

明和二年十月五日瑞村南院有之明乃

其日書中(百)ありて其全抄之瑞子

明和四年三月廿八日瑞村南院有之瑞為

之と云ふ

明和七年十月十日院村湯後首と云ふ
十日管中八百と云ふ事合はと云ふ

明和八年十月十三日院村湯後首と湯村
之と云ふ

安永元年秋湯城の湯と云ふ事合はと云ふに
院村湯用と云ふ事合はと云ふ

安永二年閏二月六日院村湯後首と
湯村と云ふ

同十年十月廿八日院村湯後首の村と云ふに
時膳と云ふ

同十年十月十日院村湯後首と云ふ事合はと云ふ

管中に在りて事合はと云ふ

安永四年二月廿日又湯後と云ふ事合はと云ふ
所合はと云ふ事と云ふ事合はと云ふ

同十年八月八日院村湯後首と湯村と云ふ
安永五年四月四日院村湯後首と湯村と云ふ

安永六年二月六日院村湯後首と湯村と云ふ
院村湯後の村と云ふ事合はと云ふ
院村湯後の村と云ふ事合はと云ふ

同十年十月十日院村湯後首と湯村と云ふ
院村湯後の村と云ふ事合はと云ふ

安永七年二月八日又湯後と云ふ事合はと云ふ
湯村と云ふ

安永九子年秋路傍の古木に
臨村南用のまはらばりし

天明元年九月廿三日
臨村南用のまはらばりし

同日十月五日又
臨村南用のまはらばりし

天明六年十月廿三日
臨村南用のまはらばりし

天明八年秋路傍の古木に
臨村南用のまはらばりし

寛政六年十月廿三日
臨村南用のまはらばりし

寛政七年十月廿三日
臨村南用のまはらばりし

同日十月廿五日
臨村南用のまはらばりし

同日十月廿七日
臨村南用のまはらばりし

文化二年九月廿三日
臨村南用のまはらばりし

文化三年十月廿三日
臨村南用のまはらばりし

宝曆十三年二月十八日

御書院者巨塊日向守也

御書院松平飛騨組助右衛門守良嫡孫孫祖

三右衛門 中野法常尹周

法常名

政左衛門

明和元年二月三日臨月名是と云

三右衛門返一奉る

同春秋安永元年秋澄城小多く

名也す

安永六年四月日光の法信日随ひ

天明元年秋澄城小多て守一也

寛政五年二月廿日群入青山名法也支那

寛政六年七月五日致仕

宝曆十三年三月十八日

御書院番巨勢日向守

和歌山府内城番組番長兼家老

三景 朝比奈新次郎

法印

明和元年 奉和路城の警備に当り

明和二年 三月廿日 鎌倉の御番に當り

三景 奉和

明和六年 三月廿日 死 二十七歳

13

14

15

16

17

18

19

20

